

### 奈緒からの電話 - 崎陽軒のシウマイ弁当 -

今朝、私は心臓の診察で、渋谷の病院に出掛けました。習慣のようになっている奈緒の電話が、病院にいる時に入りました。あわててエントランスホールに出て、「今、病院だからね」と小さな声で言うと、

「お母さん、ご気分いかがですか〜」

「病院だからね、あとでね」

「あらあら〜、たいへんでしょう〜、そりゃ〜困ったもんだ！」

「奈緒ちゃん、電話切るよ！」強く言うと、「やさしく……やさしく…ね」。

静かに言いなさいと言わんばかりで、「お母さん、きのうありがとうございました、崎陽軒！ おいしいよ〜、崎陽軒おいしかったです〜」。

奈緒なりに一生懸命に気をつかった会話でした。

奈緒はきのうの朝、出掛ける準備をしたがらず、職員さんを困らせて……。時々そんな事があります。

「奈緒さん、職員さんたちを困らせずに、グループホームでがんばってください！ みんなに可愛がってもらえるように……。そしたらまた、崎陽軒のお弁当、届けるからね！」

崎陽軒のお弁当は、奈緒の大好きです。

西村信子



# やさしくレター

第1号

Yasashiku Letter

制作・発行 やさしく応援団

E-mail: yasashikunaani@gmail.com TEL: 03-3406-9455 (いせフィルム)

みなさん、「一緒に！」  
「やさしくレター」の第1号をお届けします。突然ですが、スポーツの試合後のインタビューで「皆さんの応援が力になりました。これからも応援よろしくお願います」という言葉を聞いたことがありませんか。応援されるのは、嬉しい。応援されると、力が湧く。応援はされる方とする方をかたく結びつける。映画『やさしくなあに』を観て、もっとこの映画をいろいろの人に観てもらいたいと思いました。そうだし！応援すればいいんだ！負けてばかりのサッカーチームを応援し続けるサポーターのように、それぞれのやり方で、できる形の応援をしよう。そう思った有志が「やさしく応援団」を結成。といっても決まった活動があるわけではありません。しかし、映画をたくさんの人に観てほしいという目標があります。そこで、上映会などで配れる新聞「やさしくレター」と、離れていても応援できるウェブサイトを始めることにしました。映画を見た人、映画を通して出会った人たちが、感じたことを伝えあう場になればと思います。みなさんの声を集めて、映画『やさしくなあに』を応援していきたいと思えます。やさしく応援団は、いつでも誰でも大歓迎です。さあみなさん、一緒に！

## はじめまして！「やさしく応援団」webサイトです。



Web <https://yasashikunaanijimdo.com>  
Twitter @yasashikunaani 「#やさしくなあに」で応援ツイート！



あなたも参加しませんか？



### のりかず 弟・記一くん

「奈緒ちゃんは弟の記一が大好きだ」

35年にわたる映画『奈緒ちゃん』シリーズで、奈緒ちゃんと共に成長の記録を綴られているのは、弟の西村記一くん。まだ幼稚園生だった頃の記一くんの印象的なシーン……。お母さん「ノリくん、ちょっと来てごらん、ほら」呼ばれてキッチンに来たまだ幼い記一くん。お母さん「これチャボのタマゴだって」記一「チャボってねえ、幼稚園にもいるんだよ！」お母さんを見上げて記一くんが言う。その記一くんも、もう40才になろうとしている。姉の奈緒ちゃんに変わらぬ愛情を注ぎながら、自分の人生を模索し続けている。一時は「びぐれっ」と、奈緒ちゃんや障がいのある仲間達にかかわる仕事に取り組んでいたが、今は別の仕事をしている。記一くんは数年前から和太鼓に夢中だ。横浜の和太鼓グループ「音や」の主要メンバーとして活躍している。人生につまづき、深い悩みの渦中にある時、和太鼓を叩くことで自分自身を鼓舞し続け、その仲間たちの存在が力を与えてくれたのだと言う。映画『やさしくなあに』はきょうだいの映画だね、と言われたことがある……。奈緒ちゃんのお母さんは私の実の姉であり、幼い頃から苦勞の多かった姉へ、弟である私からのささやかなエールのような思いが、35年間の記録を支えたかもしれない。奈緒ちゃんは弟の記一が大好きだ。映画の後半で奈緒ちゃんは記一くんを励ますように語りかける。奈緒「うん……まあ、これから……人生まだまだでしょ？」記一「少しは強くなったかなとは思いますがね」言い終えて少し咳き込む。奈緒「だいじょうぶ……」やさしく言って記一くんの背中をポンポンと叩く奈緒ちゃん。映画『やさしくなあに』は家族の物語……家族とは、夫婦であり、親子であり、きょうだいのこと。奈緒ちゃんと弟・記一くんとの、きょうだいの絆の物語はまだまだ続く。伊勢 真一（かんとく）



映画『やさしくなあに』で印象的に流れる「殖生の宿」という曲、ちよつと調べてみると、イングランドの作曲家ヘンリー・ローリー・ビショップが1820年にイタリアの民謡にヒントを得て作曲したもので、1823年にビショップが「ミラノの乙女」というオペラをつくった時に、アレンジを変えて挿入曲としたものだそうです。作詞はハワード・ペインで、タイトルを直訳すると「楽しいわが家」となりますが、内容は「どんな宮殿でも、粗末なわが家に勝るものはない」と故郷への想いを歌ったものです。



### 『やさしくなあに』の音楽の話 Home Sweet Home 殖生の宿

今日ではオペラ「ミラノの乙女」が上演されることはほとんど無いようですが、「Home Sweet Home」だけは歌い継がれ、民謡のように今も親しまれる曲となっています。ちなみに、日本でこの曲が初めて演奏されたのは、ペリーが黒船で日本に來航した時。ミシシッピ号の楽隊により演奏されたという記録が残っているそうです。明治時代になって、「庭の千草」の歌詞の作者でもある里美義（さとみだし）が「Home Sweet Home」に詞をつけ「殖生の宿」として唱歌集に収録されました（1889年）。原詞の内容を生かしながら、文学調の美しい日本語詞に置き換えた「殖生の宿」は、日本人の琴線に触れる曲となって広く親しまれていきました。外国曲が「敵性音楽」として禁止された戦時中も「殖生の宿」はリストから外されたというのも、この曲がいかに日本人に愛されていたかを物語るエピソードのひとつです。

### 応援団に届いた「やさしくなあに」



晩秋、母からの絵手紙に気持ちがいゆるりとほぐれました。「幼い頃、あなたが落ち葉でままごと遊びをしていたことを思い出して、描いてみました」と書いてありました。（モリー）

戦後になっても「殖生の宿」は唱歌としてだけでなく、幅広く歌い継がれていきます。「二十四の瞳」（1954年）、「ピルマの竖琴」（56）、「火垂るの墓」（88）などの名画でも、「殖生の宿」は効果的に使われてきました。「やさしくなあに」も「殖生の宿」が印象的に流れる映画の一本として、人々の記憶に残っていくと良いなあ、と思います。（いたちゃん）

